「海水浴」の語誌的研究

青木　純一　　北野　与一*

A Study of Terminological History on "KAISUIYOKU"

Junichi Aoki　　Yoichi Kitano*

要　旨：
「海水浴」という語彙がいつ，どのような方法で日本に導入され，さらにどんな経過を辿って広まり定着したか，その歴史的経緯を文献・資料から明らかにした。
「海水浴」は幕末期に西欧に派遣された使節団が実際に海水浴場を見聞したことに始まる。これをきっかけに「海水浴」の目的や効能を学び，のちの普及に大きな影響を与えた。また，「海水浴」という語彙を最初に使ったのは金沢藩医学教師スロイスであると思われる。明治に入った頃から各種の「海水浴説」が普及するとともに「海水浴」はますます広がりを見せ，明治20年代前半には市民生活の中に定着した。

キーワード：
海水浴　　語彙　　使節団　　スロイス　　海水浴説

I　はじめに

海水浴は，治療を目的として「1796年イギリスに初めて登場し（中略）1808年，ドイツの一医師」[(1)]「ベネッケ博士がイギリスの海岸療法を研究推奨せし」[(2)]により，夏季中の行事として世界的に広がったのである。なお，わが国でも「古くから潮浴（しおあみ），潮湯治（しおとうじ）などの名で医療のための海水浴が行われていた」[(3)]が，「明治時代になるとレクリエーションのために海水浴をおこなう（中略）近代的海水浴がしだいに定着しはじめ」[(4)]たのであった。

この「海水浴」という語彙は，笹島恒輔[(5)]や川本信正[(6)]も報告しているように，西欧語の訳語として登場した語彙と考えられている。しかし，それがどこの国の語彙の訳なのかなど，なお不確かな点も残されている。こうした点をよりつまびらかにすることは，海水浴史上肝要なことと考えられる。

II　目的と方法

「海水浴」の移入に係る諸問題，特に「海水浴」の原語及びこの語彙の普及・慣用化について，文献的資料により検討し，より明らかにする。

＊ 北陸大学名誉教授　Professor Emeritus, Hokuriku University

Ⅲ　結果と考察

1．海外視察等による見聞
—「海水浴」誕生の前史

訳語「海水浴」がわれわれの前に現われる前に，日本人は，海外視察等によって西欧の「海水浴」を見聞していた。

わが国では，幕末，約８回にわたり使節団等を欧米に派遣し，条約の批准交換を初め，外交交渉や視察等を行っている。[7] ここでは，そのうちの竹内下野守ら文久の遣欧使節団（1861～）とパリ万国博覧会参列と締盟各国聘問のために渡欧した徳川昭武一行（1867～）を取り上げて検討する。

①竹内下野守ら文久の遣欧使節団

竹内（保徳）下野守ら遣欧使節団は，文久２（1862）年５月17日（陽暦６月14日）アルジュノ号で軍港へレフートスライスに到着，快走艇「獅子（レーウ）」号でロッテルダムに着き，歓迎を受けた。[8] この到着地の歓迎状況を初め，使節団一行の視察の実際を当地の『新ロッテルダム新聞』が日々詳細に報道した。同紙の６月25日の記事に，以下のような内容が記載されていた。

「二十五日，曇り，雨少し降る。（中略）夜は外務大臣ファン・デル・メーセン・ド・ソムブレフ主催の宴会に招かれた。会場はハーグ郊外スヘベニンゲンの『大市営海水浴場』である。このときスヘベニンゲンの村では，日本使節らに敬意を表して家ごとにオランダの三色旗（国旗）を掲げ，海水浴場には日章旗が翻っていた。（中略）この日はあいにくしぐれ模様であったが，小丘や海水浴場の階下にはおびただしい数の見物人が見られた。やがて一行は，会場に来たときは新道を通ったが，帰りは古い村や旧道を通ってハーグに帰った。」[9]（以上：蘭文）

この現地新聞の報道は，次のことを示唆している。

ア．総勢38名からなる一行は，スヘベニンゲン村の「大市営海水浴場」をつぶさに見聞し，「海水浴」（bad：蘭語）の原語を初め，「海水浴」に係る幾つかの蘭語を見聞し学んだものと考えられる。

イ．なお，一行の中には，蘭通詞福地源一郎（1841-1906）や立広作（1845-1879）のほか，傭翻訳兼医師箕作秋坪（1825-1886）や松木弘安（寺島宗則），傭通詞福沢諭吉（1835-1901）[10] など，蘭語に通じた多くの人材がいたことから，海水浴の目的や効能等々についても，現地関係者から学んだものと推知できる。

②徳川昭武一行の渡欧

当時14歳であった将軍徳川慶喜の実弟徳川昭武は，1867年，パリ万国博覧会へ将軍の名代として派遣された。その徳川昭武のパリ滞在に係る彼の日本文及び仏文の両日記が『徳川昭武幕末滞欧日記』として公刊された。ここでは，この日記を中心に検討する。

徳川昭武は，滞在中，当地の「海水浴場」を見聞し，自ら海水浴を初体験したことについて，以下のように，仏文で綴っている。

・「シェルブール，ブレスト，ナントへの旅行日記」の1868年８月２日　日曜の一節
（Dimanche，2　Août　1868）

Après dîner nous avons fait un tour au bord de la mer, et nous nous sommesarrêtés à l'Etablissement des bains,où nous avons pris le café en regardant la pleine mer. Ensuite nous nous

sommes promenés sur la jetée,au bout de laquelleil ya un phare; puis nous sommes rentrés à l'hâtel, et nous nous sommes mis bien vite dans le lit.[11]

・同前日記の8月26日　水曜の一節

(Mer-credi 26 Août)

Une heure après j'ai pris un bain de mer fort agréable. Après dîner nous nous sommes promenés sur la plage,et nous nous sommes amusés à jeter des pierres dans l'eau avec Mr.Coidé.[12]

以上の日記には，à I'Etablissement des bains（「海水浴客用施設」）[13]や，あるいはUne heure après j'ai prisum bain de mer fort agréable（「1時間後に私は海水浴をした。快い。」）[14]など，仏語の海水浴が慣用されていた。このように，徳川昭武は，原語で受け入れ，海水浴の実際を体験し，その効能も自ら経験したのであった。

この日記の記載時期は，時おりしも維新期であり，仏文日記ということでもあり，社会への影響は見られなかった。しかし，一行の中には，渋沢栄一を初め，次代を担っていった有能な人材が多々いたことから，これらの人たちの見聞や体験は，後年の海水浴場の開設や海水浴そのものの普及に少なからず影響を与えたものと考えられる。

2. 西洋医学の導入—「海水浴」の誕生

わが国では，幕末から明治初年にかけて西洋文化の導入に力が注がれた。その移入に当たり，多くの西洋人を招へいして指導に当たらせ，軍事や学問等々の近代化に努めた。

金沢藩でも例外ではなく，医学館教師として，「和蘭陸軍一等軍医 P.J.A.スロイス」（Pieter Jacob Adrian Sluys，1833 1913，明治4（1871）年—同7（1874）年在職）とA.C.ホルトルマン（Adriaan C Holterman，明治8（1875）年8月—同12（1879）年6月在職）の2人を招へいしている。[15]健康学講義も行っていたスロイスは，「講義の中でも冷浴場の設置の必要性を強調し」，更に，金沢藩庁に対し，以下のような「海水浴場の設置」（藤本純吉記：医事小言）[16]を進言した。[17][18]

「夫レ冷浴ハ皮膚ノ汚垢ヲ去リ身体ノ生長ヲ催進シ健康長寿ヲ保全スル最要ノモノトス（中略）余思フ往古以来已ニ慣習セル俗風ヲ一時ニ改正センハ固ヨリ難キ所ナリ　然レ氏藩廳如シ余カ説ヲ是トセハ區々ニ冷浴場ヲ開カシムヘシ且ツ金澤藩ハ従来海岸ニ近ク舟楫ノ便モ自由ナレハ茲ニ一利アリ　夫レ海水浴ハ慢性諸病ノ奇楽ナレハ浜濱ニ一ツノ浴場ヲ開クヘシ　是レ亦タ実ニ仁政ノ一ナリ　和蘭ニ於テハ已ニ都府ヨリ海岸ニ通シテ此道ヲ開ケリ　故ニ藩廳如シ余カ説ニ一決セハ　和蘭海水浴場ノ結構造作亦タ為ニ詳解スヘシ

紀元千八百七十一年八月第五日　金沢藩ニ於テ

和蘭陸軍第一等医官　　私魯伊斯誌　」

このスロイスの進言書は，われわれに対し，以下のような幾つかの事実を明らかにしている。

ア．進言書中に記された「海水浴」（「海水浴場」）は，管見の限りでは，文献上の初見と考えられる。

イ．「海水浴」という語彙は，オランダ語の訳が最初である。

ウ．その訳に携わったのは，当時，スロイスの講義通訳に当たっていた蘭方医黒川良安（1817-1890）を筆頭に，武谷俊三，馬島健吉及び伍堂卓爾であった。

エ．笹島恒輔は，「海水浴という用語」を「初めて使用したのは蘭方医の松本順（良順）」[19]とし，川本信正は，「海水浴という用語（おそらく英語からの訳）を初めて用いたのは軍医総監松本順（良順）だ」[20]と報告している。しかし，この「海水浴」という用語を松本順が初めて使用したとする両者の説には，疑問が残る。松本が大磯海水浴場を開設したのが明治18（1885）年，『海水浴法概説』を世に出したのが翌19年のことであり，[21]スロイスの明治4（1871）年以前に，松本が「海水浴」という用語を使用した文献的資料は見当たらないからである。

オ．スロイスは，海水浴の「慢性諸病」の効能を強調し，海水浴場の設置を提唱したが，数年後，緒方惟準と村瀬譲も，「海水浴説」（『醫事雑誌』）を発表，海水浴の効能と適応症，あるいは「海水浴所」について論じた。[22]この両者の主唱からも明らかなように，わが国の海水浴は，治療目的から始まったのである。

3.「海水浴」の普及

「海水浴」という語彙及びその実際を急速に普及させた背景には，明治初年から蘭方医らによって提唱された数件の「海水浴説」を初め，併せて海水浴場の開設やそれにかかわる新聞報道等が見られた。こうした背景の特徴や意義，あるいは普及・定着などに関して以下検討する。

(1)「海水浴説」の特徴と意義

明治20（1887）年頃までに，以下に掲げる4件の「海水浴説」が公表された。

ア．緒方恒準・村瀬譲，海水浴説，醫事雑誌，第29号，（1875）[22]

イ．内務省衛生局，海水浴説，内務省衛生局雑誌，第34号，（1881）[23]

ウ．後藤新平，海水功用論附海濱療法，石井榮三，（1882）[24]

エ．松本順口授，二神寛治筆，海水浴法概説，杏陰書屋，（1886）[25]

初めに，これら4件についての共通点と各説の特徴を概観することにする。

①共通点と特徴

ア．共通点

4件の説には，内容上で多くの共通点が見られた。その内容の詳細を省略し，共通項目を挙げると，海水の成分，波動の働き，海気の特質性，効能を生み出す要因，適応症（障害も含む），禁忌（禁忌症，身体状態等），浴法，海水浴場（海水浴所）の開設等であった。その主唱の主目的は，海水浴に係る疾病（障害）の治療効果，換言すれば，海水浴の効能についての専門家を初め，広く一般社会への啓蒙にあった。そのためには，海水浴場の設置が不可欠なことであると，提唱していた。なお，海水浴に係る学問的内容や外国における海水浴事情については，その多くは外国文献を主資料としていた。

イ．各説の特徴

(a) 緒方惟準・村瀬譲の「海水浴説」

この緒方・村瀬の説は，外国文献を参考資料に，海水浴に係る西欧諸国の現状をつぶさに紹介し，海水浴場を「海水浴所」と呼称していた。なお，共通点でも述べた海水の成分，水温，効能を生み出す要因，適応症，禁忌事項，浴法等において，医学分野で啓蒙の先べんを着け，後年提唱された海水浴説の先導的役割を果たした。

また，「余輩ハ江島ニ旅寓シ七里濱ニ於テ將ニ之ヲ試ントスルナリ」[26]と，海水浴場の開設にも意欲を見せ，医学関係者に対し浴場設置の必要性を提唱した。

(b) 内務省衛生局の「海水浴説」

この内務省説は，主として冷浴について論じていたが，適応症については，温浴についても論じており，また，禁止事項として，食後及び酒飲後（「酒ヲ嗜ム人」）の海水浴を挙げ，後述する浴場医師の配備や運動・遊戯施設の具備を提唱していた。

治療を主目的とする海水浴であるので，その浴場には医師の配備は必要であるが，内務省の提唱ということで大きな意義があった。

また，疾病や障害をもつ人たちの心身をいやし・ほぐすための運動施設や遊戯施設等を具備することも肝要であると指摘していた。この娯楽施設の具備が必要であるとの海水浴場観は，後年，娯楽に比重を置く近代的海水浴へと移行・発展していく素因を含んでおり，注目すべき海水浴場観であった。[27]ちなみにその施設の概要は，次のようなもので，児童や婦人についても配慮されたものであった。

「散歩場及ヒ游戯處」，「借馬，賃舟等」，「室内運動ノ場」，「浴場ノ客舍ニハ諸種ノ冊子及ヒ全國中ノ新聞紙等其他各種游樂ノ具例之棋，將棋等」，「屋蓋アル投球場」，「鞦韆，桔槔板及ヒ體操ノ諸器」，「歌舞音曲場」，「雑品，玩弄物，寫眞及ヒ諸海產等ノ販賣舗」

(c) 後藤新平著『海水功用論附海濵療法』

後藤新平は，本書の「諸言」の中で，「稿ヲ再ヒ校訂シ更ニ内務省雑誌中俗問ニ緊要ナル者ヲ抜萃シ尚ホ聊力鄙説ヲ添ヘ（中略）公衆ノ便益ニ供セントス」と述べており，本書は，先の内務省衛生局雑誌中の「海水浴説」を更に補充し，「鄙説」も加えて一般の人たちに役立てようと上梓されたものであった。当然ながら，本書には，その内務省説と多くの類似点が見られたが，以下のような注目すべき点も見られた。

新しく「海濵療法」という用語を使い，この療法に係る適応症を分かり易い近代的な名称で指摘したり，禁忌事項として，労働後，飲酒後，疲労困ぱい時，旅行後，興奮状態時等，生活実態と関連させて解説していた。[28]また，適応症に加えて，灌漑（かんがい）法，腟内注入法，灌（かん）腸法，飲食法，海濵砂浴等や「浴地ニ赴ク羈旅中ノ注意」，あるいは海水浴に係る「飲食攝生」について詳細に解説していた。[29]

海水浴場における「浴場醫士」の配備や運動・娯楽施設の具備については，内務省説と同じ内容であったが，それらに加えて，「假設ノ藥舗」の開設，「衛生警察」の問題，「終年開場スル者ニアラサル」浴場及び療養地における「住民經濟上」の課題などについて提案し，警鐘を鳴らしている点に大きな特徴が見られた。[30]

なお，後藤は，本書の中で，明治14（1881）年，愛知県知多郡大野村千鳥ヶ浜海岸の「大野海水浴場」の開設（愛知県令に協力し）に尽力したり，愛知県参州佐ヶ島に浴場開設の調査に赴いたことなどを明らかにしており，[31]本書は，外国文献から得た知見に，彼自身の実体験からの経験知をも加え補った海水浴に係る啓蒙書であった。

(d) 松本順口授『海水浴法概説』

本書は，松本順（良順）が明治18（1885）年に神奈川県大磯照ヶ崎海岸にて「大磯海水浴場」を開設した後に刊行されたものである。従って，本書には，先の後藤新平以上の経験から生まれ

た諸事項が所載され，近代的海水浴観さえもかい間見られた。

松本は，本書の冒頭で「海水浴ハ能ク疾病ヲ治スル而已ニ非スシテ健康ノ人体ヲモ更ラニ益々健康ナラシムルモノナリ」[32]と言い切っている。この「健康ノ人体ヲモ更ラニ益々健康ナラシムルモノ」という海水浴観は，近代的海水浴観の根底をなす理念であり，新しい考え方を示したものであった。いみじくも，湯本が「大磯の海水浴場は近代的海水浴を念頭に置いて開設された初めてのもの」[33]と評価しているのは，この考え方にあった。

松本は，海水浴の効能と適応症を「先哲ノ云フ所」も取り入れて7項目にまとめている。その「効能」（適応症）の概略は，以下のとおりであった。[34]

「第一　體質ヲ善良ニシ營養ヲ壯盛ナラシム」（「結核性腺病質。遺傳梅毒等賦性薄弱ニメ且ツ營養不良ナルモノ」）

「第二　新陳代謝及分泌機能ヲ催進セシム」（「手足常ニ微冷ノ感アルモノ。脂肪過多ニメ大ニ肥胖セルモノ。又消化力遲慢ナルモノ」）

「第三　諸般ノ衰弱現象ヲ快復セシム」（「全身ノ營養及ヒ神經若クハ筋肉ノ機能減衰セルモノ」）

「第四　貧血症狀ヲ痊癒セシム」（「貧血症。萎黄病。間歇熱後ノ貧血。產後ノ衰弱又タ貧血等ニ起因セル心悸亢進。身體倦怠。頭痛。眩暈。神經過敏」）

「第五　皮膚及ヒ粘膜ヲ強厚ナラシム」（「皮膚軟弱過敏ニメ容易ニ外襲ニ感シ易キ僻アルモノ」）

「第六　消化機能ヲ皷舞整理セシム」（「胃弱又タ慢性胃加苔兒ニ起因セル食氣不振。消化不良。呑酸嘈囃。食後ノ停滯。常習便秘及ヒ胃痛等ノ宿痾アルモノ」）

「第七　神經及ヒ精神的諸病ヲ調整セシム」（「常習頭痛。又顔面痛。胸痛。諸他軀肢ノ神經痛神思鬱症〈中略〉肺病。氣管病」）

なお，第一の適応症として，「氣管支加答兒等ヲ反復シ易キモノ（寒冒シ易ク咳嗽頻發スルノ僻等）」を，第五で「感冒シ易キモノ」を挙げていることは，今日でも海水浴の効能の一つとして言い伝えられていることであり，注目すべき適応症であった。

また，松本の実体験から生まれたものとして，浴し時間の弾力的とらえ方と砂浴の胃腸疾患への効能の確認が本書に所載されていた。松本は，「一浴ノ間三十分許ナルヲ要ス故二十二時間ニ二回浴シテ足レリトス然レト其ノ稍々習慣スルニ從テ漸次其數ヲ增シ尚ホ多キヲ以テ好シトス」[35]と提唱し，現地の児童の観察，あるいは自ら試みたり，「腸胃患者」対象に試みて，砂浴の効能を確認し，それを推奨したのであった。[36]こうした経験知を活かした海水浴に係る取り組みは，外国の縛りから脱皮し，わが国特有の近代的海水浴の一歩を踏み出したことを示唆していた。

②史的意義

明治初年から同20（1887）年にかけて提唱された「海水浴説」には，海水浴史上評価すべき点が若干見られた。

ア．「海水浴説」による海水浴に係る提唱，広報及び啓蒙の諸活動は，庶民生活に変化を与え，庶民にとって健康生活向上の契機となった。こうした契機を文明開化と合わせて提供したことは高く評価される。

イ．「海水浴説」の提唱者たちは，海水浴場

の早期開設を主張するとともに，自らもその開設に直接・間接に尽力した。この実践を伴った「海水浴説」の提唱は，海水浴場の開設や海水浴の普及を加速化させた一因でもあった。

ウ．「海水浴説」は，海水浴場に医師の配備や娯楽施設の具備をも提唱していた。こうした浴場観は，治療主義海水浴観オンリーから近代的海水浴観，つまりレクリエーション主義海水浴観へと発展していく素因をはらんでいた。そうした海水浴観に立った初めての海水浴場が，松本順が開設した神奈川県大磯海水浴場であった。この大磯海水浴場が「日本の海水浴場の明確な発祥の地とされている」[37]のは，上記の背景があったからである。

この近代的海水浴への発展は，大磯海水浴場を皮切りに早急に進み，夏季レジャーに変化をもたらし，水泳界（泳法や水着類などの着用物）の近代化に貢献したのであった。

エ．「海水浴説」は，海浜の空気，つまり海気が疾病や障害の治療に役立つ旨を強調していた。海気は，陸気と異なり，酸素に富み，清潔で新鮮であり，塩分を多く含み湿潤で気温が均一という特質性をもっていると，とらえられていた。後年，開設されていった海浜療法を取り入れたサナトリュームの開設地選定には，この海気の特質性が大きく影響したのである。例えば，「鎌倉海濱院」は，好例の一つである。『郵便報知新聞』（明治20（1887）年8月3日）は，この「鎌倉海濱院」について，次のように報じている。

「今度相州鎌倉に創立して一昨日より開業したる海濱院は歐米のサナトリア，マリチマ即ち海濱養生所に倣ふて創立したるものにて海氣を吸収し海水に沐浴し以て身體の養生を爲す所なり　故に生質虚弱な人殊に肺病，梅毒等を父母より遺傳し或は出生の後滋養の宜しからさる爲め虚弱となり或は驚風に罹りし小兒の爲には實に欠く可らさる養生所なり又た大人の慢性胃病，子宮病，肺病の初期，僂麻質に宜く其他重病後の養生所には最も適當なる所なり（後略）」[38]

以上の記事も述べているように，海気の効能問題は，海水や波動の効能問題以上に重視され，その特質性の強調は，海浜療法の主要条件として医学的進展に少なからず貢献したものと考えられる。

(2)「海水浴」の普及と定着

「海水浴」の語彙と実際の普及・定着には，以下に述べるような公的機関の関与を初め，論文・著書等の公刊，海水浴場の開設，新聞報道等が大きく影響していた。

ア．公的機関の関与

既に論じたように，金沢藩庁への医学館教師スロイスの進言書や内務省衛生局の「海水浴説」を初め，後藤新平が愛知県令國直廉平の指示によって尽力した愛知県大野海水浴場の開設及び「陸軍々醫總監」在任中に公刊した『海水浴法概説』や大磯海水浴場の開設などは，国や県という公的機関と深くかかわっていた。こうした公的機関の関与は，「海水浴」という語彙とその実際の普及を加速化させた。

イ．論文・著書等の公刊

緒方と村瀬は，「温泉浴ノ如キモ亦衛生養痾ニ益アル醫俗共ニ既ニ之ヲ知ル　然ルニ海水浴ニ於テハ其効驗之ヲ知ル者甚タ少シ」[39]と，当時の「醫俗」全般の「海水浴」に係る認識の実態を述べている。こうした実態を踏まえて両者は，『醫事雑誌』に「海水浴説」を発表したのであっ

た。その「海水浴説」で，「海水浴」の効能や適応症を詳しく解説し，「海水浴」が西欧の各国で成果を挙げていることを紹介するとともに，わが国でも「海水浴所」の設置に早急に取り組むよう医学界に求めたのであった。医学界に対する両者の紹介や提唱は，治療に携わる医学関係者の理解を深めた点で大きな意義があった。

また，後藤や松本による海水浴関係書の公刊には，「海水浴」に係る大規模な広報が企画されていたようである。このことは，『海水功用論附海濵療法』の末尾に，東京，大阪，静岡など，32ヵ所の「専賣書肆」が，一方，『海水浴法概説』にも8ヵ所の「書肆」や「賣捌」が掲げられていることからも明らかであろう。海水浴に係るこうした書物の広域販売は，「海水浴」の普及に少なからず影響を与えていた。

ウ．海水浴場の開設

明治10年代から同20年代にかけて開設された海水浴場は，概略次のようである。（以下，海水浴場名：開設場所，開設年，（出典）の順で記す。）

- 沙美海水浴場：岡山県倉敷市玉島黒崎，明治13（1880）年，（「オープンエア・おかやま」岡山観光案内）
- 大野海水浴場：愛知県知多郡大野村千鳥ヶ浜海岸，明治14（1881）年，（相賀徹夫編著，前掲書，第4巻，p.625）
- 二見浦海水浴場：三重県伊勢市二見町，明治15（1882）年，（「町コミ」三重県）
- 大磯海水浴場：神奈川県大磯町照ヶ崎海岸，明治18（1885）年，（湯本豪一，前掲書，p.218）
- 一の谷海水浴場：神戸市須磨区西部，明治20（1887）年，（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編，日本国語大辞典　第二版，第3巻，第1刷，小学館，（2001），p.219）
- 富岡海水浴場：相州久良岐郡富岡村，明治20（1887）年頃か，（郵便報知新聞，4版第4969号，明治22（1889）年8月13日，p.1，（郵便報知新聞刊行会編，前掲書，第66号，p.543））
- 大洗海水浴場：茨城縣下東茨城郡磯濱村字大洗，明治20（1887）年頃か，（郵便報知新聞，第4375号，明治20（1887）年8月31日，p.1，（郵便報知新聞刊行会編，前掲書，第60号，p.499））
- 稲佐の浜海水浴場：島根県大社町，明治21（1888）年，（「いずもる」島根の風土，くらし等のサイト）
- 浦富海水浴場：鳥取県岩美郡岩美町，明治27（1894）年，（ANA／JAL共同出資「国内線航空券予約購入サイト」）

わが国の海水浴場は，上記の事例も示すように，明治10年代から同20年代にかけて，識者による海水浴説の提唱と並行して次々と開設された。この海水浴場の開設は，それぞれの地域社会における経済・文化の活性化を生むとともに，併せて「海水浴」の広報と普及に大きな役割を果たしたのであった。

エ．新聞報道

海水浴場が次々と開設され，そこには新しい風俗や娯楽等が現われてにぎわい始めると，それらに係る新聞報道も漸次多くなっていった。例えば，海水浴場に係る次のような報道が見られた。

・『郵便報知新聞』，明治20（1887）年8月9日

「大磯禱龍館　數年前より大磯驛に赴きて海浴及び海水温浴を試むる人漸く其の數を加へ來りし折柄偶ま松本陸軍々醫總監の比處に遊びて浴者を診察せしに其の効驗も頗る著明なりしを以て自から發企者となり松平太郎，井上清一諸

氏と計りて小陶綾の濱に面して海濱に一大巨館を築き名けて禱龍館といふ（後略）」[40]

・『神戸又新日報』，明治20（1887）年8月24日

「一の谷の海水浴に付いては，前号の紙上に記する所ありしが」，「尚昨日同地よりの通報に拠れば，同海水浴場は海月館と称し」[41]

・『郵便報知新聞』，明治20（1887）年8月31日

「大洗の海水浴　茨城縣下東茨城郡磯濱村字大洗には既に海水浴場の設けあり潮水殊に清鮮にして且つ（中略）波濤常に穏かにして童幼婦女子と雖ども安全に水浴を爲し得るの便あり又た同所には茶店四五軒あり其内最とも著明なるは魚來庵なり毎戸鹽湯の設けあらざるはなし（後略）」[42]

・『郵便報知新聞』，夕版，明治22（1889）年8月13日

「富岡海水浴場の衰微　相州久良岐郡富丘村は海水浴場として夙に評判の海濱にして毎年暑中には内外の貴顯紳士皆な爭ふて避暑かたゝ出向き現に三條公，井上，松方の兩伯等は別荘を設けし程の所なるか東海道鐵道の開けたる爲め大磯江ノ嶋へ客を奪はれ（中略）土地の人々は非常の影響を受けたりと云ふ」[43]

・『郵便報知新聞』，明治22（1889）年8月15日

「大磯海水浴場の景況（中略）同地は年を逐ふて繁盛に赴き旅舍抔は益々増加せり唯今ママ在の浴客は官吏學生婦人等凡そ五六百名位にして禱龍館には松方伯爵の家族，石井方には細川侯爵，石橋方には中島山梨縣知事，其他○蛯屋に小笠原，九條等の諸華族にて大概一週間餘の滞留客多く（後略）」[44]

・『朝野新聞』，明治22（1889）年8月17日

「頃日大磯に滞留する旅客中には官吏，学生の種類多く，殊に驚くべきは婦人連の大胆にも浴場に遊泳し，塩気強き大濤の畏ろしき音にて打ち来たるにも構わず，妻君，令嬢並びに女教師，女生徒らしき連中が，身に薄き金巾の西洋寝巻を纏い，首に大なる麦藁帽を冠り，三々五々相携えて余念もなく海中に遊び戯むるる事なり。塩気は無遠慮にも吹きしきりて，かえって婀娜なりと云わば云え，とにかく外の場所にてはとても見得られぬ一種の風体を現わし来たりて，あまり行儀のよき方にはあらざれども，孱弱なる我が国の婦女子が，かかる風となりしもまた開化の一端ならんか。」[45]

こうした海水浴場に係る様々な角度からの報道は，宣伝的役割を十分に果たし，交通事情の好転もあって読者を浴場へと誘い，「海水浴」という語彙とその実際の普及を加速化させたのであった。

オ．文筆家による「海水浴」の使用

巖谷小波は，漣山人の別号で「妹背貝」（吉岡書籍店編，『新著百種』，第4号，明治22（1889）年）を発表しており，その中に，次のような記述が見られた。

「夏・あつきは互ひの情『近来流行る海水浴（カイスイヨク），房州の北条，勝山，相州の鎌倉から大磯小田原熱海にかけて，行平のやうな都人が何の罪あって配所の月，わざわざ海士の真似を仕に行く』」[46]

この巖谷の「海水浴」の使用は，「海水浴」という語彙とその実際が一般社会で慣用化されていたことを示す主要な事例であった。

以上，「海水浴」の普及過程を普及に影響を及ぼした諸条件を検討してきたが，終わりに次のようにまとめて，この項の結びとしておきたい。

「海水浴」という語彙は，論文・著書等の公刊や新聞報道等によって当初から近代的な新語として急速に普及し，従来の「潮浴」や「潮湯治」に取って替わる。併せて次々と海水浴場が開設され，その実際も普及し生活化していった。従って，公的機関の関与，著書等の公刊，新聞報道及び海水浴場の増加による「海水浴」の普及，並びに文筆家による「海水浴」の使用を総合的に考えたとき，「海水浴」という語彙とその実際は，明治20年代前半までには一般社会で定着を終えたものと考えられる。

Ⅳ　おわりに

これまでの考察の結果，若干の知見が得られたので，それらを以下にまとめて，本稿の結語とする。

1．幕末，西欧に派遣された使節団等の一行は，その現地で当時流行しつゝあった海水浴（海水浴場）の実際に接し，その目的や効能を見聞し体験した。その一人，徳川昭武は，派遣先の現地で自ら海水浴を体験し，その体験を原語（仏語）に記録し，今に残した。しかし，こうした派遣された使節団等の一行から「海水浴」という和製語は生まれなかった。

2．金沢藩の医学館に医学教師として招へいされていたオランダ陸軍一等軍医スロイス（P. J. A. Sluys　1883－1913）は，明治4（1871）年，金沢藩庁に対して「海水浴場の設置」を進言した。その進言書に所載されている「海水浴」という語彙は，管見の限りでは，文献上の初見と考えられる。従って，「海水浴」という語彙は，蘭語の訳語として誕生したものと考えられる。この訳語は，当時スロイスの講義等の通訳に当たっていた黒川良安（まさやす），武谷俊三，馬島健吾，伍堂卓爾らの蘭方医によって生まれたのであった。

3．スロイスの進言書から数年後の明治8（1875）年に緒方惟準・村瀬讓が「海水浴説」を『醫事雑誌』に発表，その後，同14（1881）年内務省衛生局，同15（1882）年後藤新平，同18（1885）年松本順（良順）らが次々と特徴のある「海水浴説」を提唱した。これらの説は，次の海水浴に係る諸事項に大きな影響を与えた。

ア．「海水浴」という語彙の普及

イ．治療主義海水浴観の普及と近代的海水浴観（レクリエーション主義海水浴観）への移行

ウ．サナトリュームの開設地の選定

エ．海水浴場の開設

4．公的機関の関与，著書等の公刊，新聞報道及び海水浴場の増加による「海水浴」の普及，並びに文筆家による「海水浴」の使用を総合的に考えたとき，「海水浴」という語彙とその実際は，明治20年代前までには「潮浴」や「潮湯治」等に取って替わり，近代的な新語として慣用され定着を終えたものと考えられる。

引用文献

(1) 富田仁，舶来事物起原事典，第2刷，名著普及会，(1989)，p.52

(2) 石村貞吉ら編，下中弘発行，大辞典，第5巻，覆刻版第1刷，平凡社，(1994)，p.439

(3) 相賀徹夫編著，大日本百科全書，第4巻，初版第3刷，小学館，(1988)，p.624

(4) 湯本豪一，図説明治事物起源事典，第2刷，柏書房，(1997)，p.218

(5) 相賀徹夫編集，前掲書，第4巻，p.624

(6) 下中弘編・発行，世界大百科事典，第4巻，平凡社，(1997)，p.586

(7) 宮永孝，文久二年のヨーロッパ報告，(新潮選書)，第4刷，新潮社，(1990)，p.249

(8) 宮永孝，前掲書，pp.102-103
(9) 宮永孝，前掲書，pp.128-129
(10) 宮永孝，前掲書，p.11，15，255
(11) 宮地正人，徳川昭武幕末滞欧日記，第1版第1刷，山川出版社，(1999)，付録 p.20
(12) 宮地正人，前掲書，付録 p.27
(13) 宮地正人，前掲書，p.85
(14) 宮地正人，前掲書，p. 95
(15) 北野与一，石川県における学校体育に関する史的研究—明治初年の加賀藩（金沢藩）藩学校における筋節運動を中心に—，北陸体育学会紀要，第20号，(1982)，p.19，23
(16) 藤本純吉記，医事小言，(1875)，金沢市立玉川図書館藤本文庫蔵
(17) 北野与一，前掲論文，前掲書，p. 24
(18) 津田進三，スロイス，ホルトルマン時代の講義録から，金沢大学医学部百年史編集委員会編，金沢大学医学部百年史，金沢大学医学部創立百年記念会，(1972)，pp.679-680
(19) 相賀徹夫編著，前掲書，第4巻，p.624
(20) 下中弘編・発行，前掲書，第4巻，p.586
(21) 緒方惟準・村瀬譲，緒方惟準村瀬譲海水浴説，醫事雑誌，第29号，(1875)，pp. 7 丁-11丁
(22) 北野与一，前掲論文，前掲書，p.24
(23) 内務省衛生局，海水浴説，内務省衛生局雑誌，第34号，(1881)，pp.1-23
(24) 後藤新平，海水功用論附海濱療法，石井榮三，(岸野雄三監，吉原瑛解，近代体育文献集成，第Ⅱ期，第27巻，保健・衛生Ⅳ，日本図書センター，(1983))
(25) 松本順口授，二神寛治筆，海水浴法概説，杏陰書屋，(岸野雄三監，吉原瑛解，前掲書，第27巻)
(26) 緒方惟準・村瀬譲，前掲論文，前掲書，p.10丁
(27) 内務省衛生局，前掲論文，前掲書，pp.20-22
(28) 後藤新平，前掲書，pp.29-37，39-46
(29) 後藤新平，前掲書，pp.46-50，56-62
(30) 後藤新平，前掲書，pp.64-75
(31) 後藤新平，前掲書，緒言甲1，凡例乙1，p.6，55，56
(32) 松本順口授，二神寛治筆，前掲書，p.1
(33) 湯本豪一，前掲書，p.218
(34) 松本順口授，二神寛治筆，前掲書，pp.5-9
(35) 松本順口授，二神寛治筆，前掲書，pp.13-14
(36) 松本順口授，二神寛治筆，前掲書，pp.16-18
(37) 相賀徹夫編著，前掲書，第4巻，p.625
(38) 郵便報知新聞，第4351号，明治20（1887）年8月3日，p.3，(郵便報知新聞刊行会編，復刻版・郵便報知新聞，第10期，全6巻，第60号，柏書房，(1992)，p.389)
(39) 緒方惟準・村瀬譲，前掲論文，前掲書，p.10丁
(40) 郵便報知新聞，第4356号，明治20（1887）8月9日，p.3，(郵便報知新聞刊行会編，前掲書，第60号，p.413)
(41) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編，前掲書，第3巻，第1刷，p.218，219
(42) 郵便報知新聞，第4375号，明治20（1887）年8月31日，p.1，(郵便報知新聞刊行会編，前掲書，第60号，p.499)
(43) 郵便報知新聞，夕版，第4969号，明治22（1889）年8月13日，p.1，(郵便報知新聞刊行会編，前掲書，第66号，p.543)
(44) 郵便報知新聞，第4970号，明治22（1889）8月15日，p.3，(郵便報知新聞刊行会編，前掲書，第66号，p.553)
(45) 湯本豪一，前掲書，p.218
(46) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編，前掲書，第3巻，第1刷，p.218

（付記）
共著者，北野与一先生は平成20年9月ご逝去されました。先生には本研究をまとめるに際して一方ならぬご指導，ご鞭撻をいただきました。ここに生前のご厚情に深く感謝申し上げ，ご冥福をお祈りいたします。(青木記)